

## 軽井沢日記のうち

### 小諸の半日

見給へこれは此あたりにて鉄道草というなりと、  
我らをあないせらるる藤村の君ゆびさし給ふ。おも  
しろの草の名や、ここに汽車のたよりいできてより、  
此草の種いづこよりかはこぼれておひしなれば、名  
づけらるるとぞ、ただすくすくとたけ高くをかしげ  
なきさまなれど、いづこをか住わびてここにはうつ  
りきにけん、いとあはれなり。

懐古園といふは、古き城跡に何とかやいふ社たて  
たる処也。いと低くいづこよりも見えぬ処をえりて、  
あだふせがん為にきづきたる城なりとぞ。昔の人の  
功ほめたる碑あれどえよまず。うしろの方の見渡し  
よき処にたちて、こなたかなた見おろす。松いと多  
きがただますぐにおひたちたる、海のほとりのもの  
とはいたくことなれり。彼おれくねりたるはふきし  
をる風いとはげしければ也。さればよ、其処々其  
折々にてさまざまにかはるものなりけり。こは松の

みに見る事かはと思ふも、例のと人やにくまむ。

千曲川のながれはるかに白くみえて、水の音さび  
しく悲し。おもひ川思ふ事なくて渡るともと、師の  
君のうたひ給ひけむ。これは其川ならねど、まこと  
に堪へがたう人の心をかきみだすものは、水の音な  
りけり。青き田面は風にそよぎて、そここに家ゐ  
あり。遙に聳えし高嶺をさして、かしこは鷲のすむ  
山なりと、あないの君をしへ給ふ。谷には蔦かつら  
繁くかかりて、物恐ろしき心地す。かはりやすき山  
のさまよ。小さき黒雲かかりぬと思ふほどに、やう  
やう広がりて雨こぼれいでぬ。いかで今日ひと日と  
どまりて、布引の観音をととどめられるれど、さは  
る事あれば軽井沢に帰りぬ。

### 花つみ

あすは帰りなんとする夕べ、都なる幼き姪のつと  
にせんと花つみにゆく。昨日見おきし色よき花おほ  
く咲き乱れたる所にきぬ。見渡せばはてなき広野の  
はては、五百重山たちかさなりて、うしろに見えし  
浅間はいただき灰色の雲に隠れ、麓のみぞ少し見ゆ

る。いづこにか水の音なひ幽かに響きて、吹くとしもなき風にはらはらとちるは、尾花が袖につつみあへぬ何の涙ぞ。庭の教よそにすとは見れど、色よく咲きし撫子いと哀れなり。われもかうはいとさびし。此夕暮をいかにせましと、小さき花の一とこころにあつまれるやうなり。女郎花、同じ女のたぐひと思ふに限なくあはれ深し。草隠れに名もなき小さき花こそ悲しけれ。いかなる宿世なりけんと、其ささやかなる限をあつめぬ。かなたに黄なるさ百合一つ見出したる、いと嬉し。此花束の女王の君にせんと近よれば、しげみをぬひて流れゆく水のほとりに今一つさけり。あはれゆく水と何をか語る。さ百合は、此さびしきくれにしばしとどまり給へといへど、水はいたく思ひせまりて、いづこまでもと急ぎてゆく。ただずみをる程に、うすきかげ水にくだけて細き夕月光そひぬ。ま昼は日の光におちてかたねぶりせる月見草、今こそとよそほひいでつ。心ゆく此けしきよ。我心をいづこまでとかそさふ。いざさらばこの花野よ、命あらば又こん年。いざさらば月よ、あすよりは塵多く処せき都のすまひにて。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一年（2009）年十月十五日発行

初出：「心の華」第三卷第九号

明治三十三（1900）年九月二十日発行

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四（2022）年五月九日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。